

「名編集者エツツエルと巨匠たち フランス文学秘史」私市保彦

新たな時代を切り開いた
編集の魔術
芳川泰久

日本でどれほどエツツエルの名が知られているだろうか。バルザックやヴェルヌとの関連で編集者として名前が出てくるくらいではないか。フランスではどうかといえば、書簡を中心にした浩瀚な評伝が一九五〇年代に出て、フランス国立図書館がエツツエル展を六〇年代に開くと、没後百年を機にいくつかの研究書の類が編まれたものの、その後は、ようやくここへきて数種の書簡集と伝記が刊行されたにすぎない。エツツエルの全射程を考えると、それでもまだ十分な対応とはいえない。

彼の主だった編集の仕事だけを拾っても、バルザックの百篇近い小説の集大成ともいえるべき『人間喜劇』を企画・刊行し、いち早くスタンダールの才能に気づき、全集を企画し、その一部を刊行しているが、これは時代に対してあまりに早すぎたせいか、ほとんど売れなかった。科学冒険小説の父ともいわれるジ

ユール・ヴェルヌの才能を見いだしたのもエツツエルで、彼はすぐに契約を結び、単なる編集者の域を超えて、物語の構想から執筆の細部にいたるまで、いわば隠れたもう一人の作者であるかのように注文をつけた書き直しを指示したり、助言を惜しまなかった。だからエツツエルは、作家を掘り出すだけでなく、作風や作家のイメージまでも作りあげた編集者なのだ。五百頁を越えるこの評伝は、そうしたエツツエルの具体的な助言がいかにヴェルヌの作品に取り入れられているかを鮮やかに示して、テクスト生成の醍醐味をも堪能させてくれる。そればかりか、エツツエルは、ボードレールの「異様な」新しさにすぐさま反応し、「悪の華の増補版と散文詩集」パリの憂鬱』の出版契約を詩人とりかわす。ただ、推敲に時間がかかりすぎ、刊行は実現しなかったものの、エツツエルはほとんどあらゆる文学ジャンルに目が利いたのである。

エツツエルは、政治家、作家の三つの顔を持っている。本書は、編集者に焦点を合わせたといながら、スタールの作品までも紹介している。ところで、エツツエルの仕事で、まだひとつだけ触れていない領域がある。それは、後にベンヤミンに「集団制作のはしり」といわれる『動物の私的公的生活情景』や『パリの悪魔』を刊行していることだ。これは、バルザックをはじめ同時代の人気作家を大勢動員し、しかもグランヴィールやガヴァルニーといった版画家の挿し絵をふんだんに盛り込むことで、文章との主客を転倒する試みとさえいえるのだが、ベンヤミンは同様に『パリの悪魔』を「パノラマ的書物」と呼んでいる。ベンヤミンを敷衍すれば、パノラマの出現によって絵画が芸術の支配を脱したように、文学もまた、パノラマ的集団制作的な書物により、バルザックによって完成を見た近代小説の枠組を脱したといえるだろう。パノラマ的書物こそ、個人の天才による創造というロマン派的な文学観を根底から揺さぶったのであ

革命のキャピュシス大通りでの民衆暴動のきっかけとなった発砲が、近くの外務省の省舎の庭で歩哨にいた兵士がうっかり銃を取り落としはたけい、という事実にはかならない。指揮をとっていた中佐からじかにエツツエルが聞いたものだという。

エツツエルはこうして、外務大臣になったラマルチースに請われてその官房長官となるが、その後、ルイ・ナポレオンのクー・デターにより、ベルギーへの亡命を余儀なくされる。しかしこの編集者の真骨頂は、亡命先での出版活動にある。それこそ、国境横断的な試みて、特筆すべきは、このとき同様に亡命を余儀なくされたヴィクトル・ユゴーの、ナポレオンを断罪する声ともいえるべき『懲罰詩集』を苦勞の末に刊行し、その二年半後、傑作の誉れ高い『静観詩集』を出版し、これをベストセラーにしている点なのだ。さらには同じくベルギーに亡命していたブルードンがその地で執筆した『戦争と平和』を、彼は「コレクション・エツツエル」としてフランス国内で出版する目処をつけてもいる。

そのほか、亡命先から帰国すると、エツツエルは『教育娯楽雑誌』を刊行し、大人も読める子供向けの物語を世に送り出す。そこを、

り、その推進力こそ、天才個人の創造に対する編集力、つまり方法としての編集性であって、エツツエルは編集という作業を通じて、近代文学を新たなかたちへと押し広げたのである。

本書は、二月革命からパリ・コミューンをも貫く政治と歴史の背景を見事に織り込んで、じつに見通しのできるパノラマ性を獲得している。それこそが射程の広いエツツエルの全体像をとらえるのにふさわしい意匠の選択となっている。聞くところによれば、本書で一章を割いた『動物の私的公的生活情景』の翻訳が、この著者の手になって間もなく刊行されるという。



新編 1775円
帯=大作家のかけに名編集者あり!